

新しい 博物館に 求めるもの



石垣市立八重山博物館所蔵：八重山蔵元絵師画稿類（宮良安宣旧蔵）

新博物館建設推進シンポジウム
Symposium for Promoting the Construction of a New Museum

2024. 11/29 (金)

主催：石垣市 主管：石垣市企画部観光文化課（博物館建設準備室）



石垣市

日本最南端の自然文化都市

新博物館建設推進シンポジウム

Symposium for Promoting the Construction of a New Museum

新しい
博物館に
求めるもの



石垣市

新博物館建設推進シンポジウム

プログラム

日時：令和6年11月29日（金）

午後6時開場 午後6時半開演

場所：石垣市民会館中ホール

1 主催者あいさつ

石垣市長 中山義隆

2 基調講演

講師紹介

観光文化課博物館建設準備室 室長 西銘基恭

講演

演題：これからの博物館と文化観光

講師：文化庁 博物館支援調査官 中尾智行

3 シンポジウム テーマ：新しい博物館に求めるもの

コーディネーター

石垣市立八重山博物館協議会 副会長 山根頼子

シンポジスト①

石垣市立八重山博物館協議会 会長 大田静男

シンポジスト②

全日本空輸株式会社石垣八重山支店 支店長 木下省三

シンポジスト③

アンバル陶房 代表 宮良 断

シンポジスト④

文化庁 博物館支援調査官 中尾智行

総合討論

4 閉会

主催者あいさつ

石垣市長 中山義隆

この度は、「新博物館建設推進シンポジウム—新しい博物館に求めるもの—」にご参加いただき、誠にありがとうございます。

皆様もご存じのように、石垣市立八重山博物館は、昭和47(1972)年に、本土復帰記念事業として建設されました。開館から52年、社会教育施設としての役割を果たしてきましたが、建物の老朽化が進み、資料を保管する収蔵庫も足りなくなるなど、開館から長い年月が経つにつれ、課題も多くなってきました。過去には、新館建設のための基本構想が2回、基本計画が1回策定されましたが、様々な事情から何年もの間、中断を余儀なくされています。

その間、博物館を取り巻く環境には変化があり、博物館は、地域の歴史や文化・自然・芸術を伝えるだけでなく、訪れる人々に新たな体験や知識を提供する場として、国内外の観光客の受け入れなどにも力を入れるようになってきました。

このような状況を鑑み、石垣市では、令和6年度に企画部観光文化課内に博物館建設準備室を設置しました。今回のシンポジウムでは、博物館関係者、市民の皆様、博物館を利用されるその他多くの皆様から改めてご意見を伺い、石垣市における文化の発展と、未来の博物館の在り方を考えたいと思います。

八重山博物館新館の建設は、石垣市にとってたいへん意義深いプロジェクトです。八重山の豊かな自然や独自の文化の様相、この気候・風土が生み出した美しい芸術作品を展示し、訪れる方々にその魅力を伝える場を提供することや、石垣市民の皆様にとっても、学びや交流の場となり、地域の活性化に寄与することを期待しています。

本日は、文化庁から中尾智行調査官、石垣市立八重山博物館協議会から大田静男会長、山根頼子副会長、全日本空輸株式会社石垣八重山支店の木下省三支店長、アンパル陶房の宮良断代表にご登壇いただきます。このシンポジウムを通じて、八重山地域の文化資源の重要性や、それを活用した観光振興についても議論を深めていきたいと考えております。

また、ご登壇者の知恵と経験に加えて、地域の皆様の声を反映させることも、必要なミッションです。新しい博物館が地域に根ざし、皆様に愛される存在となるためには、皆様のご意見やご要望をしっかりと受け止めてまいります。

最後に、本シンポジウムが実り多いものとなりますよう、心より祈念いたします。皆様のご協力とご参加に感謝申し上げます。

令和6年11月29日

これからの博物館と文化観光

文化庁参事官（文化拠点担当）付
博物館支援調査官 中尾智行

❖ 令和2年4月

文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律（文化観光推進法）の公布。同年5月に施行。

❖ 令和4年4月

博物館法の一部を改正する法律の公布。令和5年4月に施行。

第3条第3項において、博物館が多様な主体と連携、協力し、当該博物館が所在する地域における教育、学術及び文化の振興、文化観光その他の活動の推進を図ることで、地域活力の向上に寄与するよう努めることを規定。

❖ 文化観光とは

有形又は無形の文化的所産その他の文化に関する資源（文化資源）の観覧、文化資源に関する体験活動その他の活動を通じて、文化についての理解を深めることを目的とする観光（文化観光推進法第2条より）

❖ 文化観光の推進の意義

文化資源の保存・修復などを適切に進めていくことを大前提として、多くの人々に文化資源の魅力を伝えることは、文化の保存・継承の意義の理解につながり、新たな文化の創造・発展につながるものである。文化の振興を起点として、経済の牽引や国際相互理解の増進につながる観光の振興を図り、さらには、人の往来や購買・宿泊等の消費活動の拡大などを通じた地域の活性化を実現することで、新しい文化の創造も含めた文化の振興に再投資される好循環が創出され、持続的な発展が可能となる。

（文化観光の推進に関する基本方針より）

文化観光の推進において目指されるのは、文化についての理解を深めること（地域の文化資源の価値や魅力を多くの人々と共有すること）、観光による地域の活性化を実現するなかで、文化の保存・継承・発展のための好循環を形成すること。

それは博物館の本来的な目的や使命と合致しており、地域の多様な主体と連携し、文化資源を保存・活用する地域の文化拠点として積極的な取組が期待される。

文化観光推進法で目指す 文化・観光・経済の好循環

地域経済の活性化

- ▶ 人の往来・消費活動の拡大
- ▶ 地域ブランドの向上
- ▶ 企業等からの寄附

文化資源の保存・活用

- ▶ 保存、修復、防災
- ▶ 体系的収集・調査結果による
価値の顕在化・発信
- ▶ 専門人材の確保・育成



文化観光とは

有形又は無形の文化的所産その他の文化に関する資源の観覧、文化資源に関する体験活動その他の活動を通じて文化についての理解を深めることを目的とする観光をいう。(法第二条)

魅力向上・来訪者の増加

- ▶ コレクションの充実・魅力向上
- ▶ 観覧者目線での分かりやすい展示、
多言語化、国内外への積極的発信
- ▶ 地域における文化観光推進事業者との連携
- ▶ 地域ぐるみの交通アクセス等利便性向上

* 『文化観光推進ガイドブック』を基に作成

新博物館建設に向けた聞き取り

石垣市立八重山博物館協議会

会長 大田静男

❖ はじめに

新八重山博物館建設が叫ばれて久しい。しかし、新博物館を建設して欲しいという強い要求は、一部を除きあまり聞かれない。市民は朝露のように次々と儂く消え去る計画に、メーナランバンユー（もう出来ないよ）とブガレ（疲れ）ているのだ。

「ブガレルな！ 諦めるな！」と言いたいところだが、でも、市民は博物館が必要と思っているのかな。どんなイメージや意見があるか。酒座、祝座、茶飲みや食事会で聞いてみた。

❖ 意見

- ①小学5年生女子：博物館知っている。でも暗い感じ。新しい博物館出来たらいいと思うけど、行かないよ。調べ物はPCやスマホでできる。でも、恐竜の展示をしたら観に行く。
- ②海人50代？：博物館？ 知ってるさー。忙しくて観に行く暇はないさー。でも博物館は子孫のために造った方がいい。ウミンチュウの道具も展示して欲しい。「展示してるー！ ハーリーの展示やったー！」って、僕らはわからんさ。公務員は宣伝が足りないよ。漁協に言ったかー。見たかったなー。
- ③小学4生男子：博物館知っている。八重山の祭りのことを知りたい。恐竜やクワガタの展示会をしたらすぐ観に行きます。
- ④80代男性：博物館知っているさ。早くつくれよ、遅いよ。大きく造れ。駐車場の入り口を広くとれ。老人がよくわかるように説明は字を大きく書いてくれ。イヤホンガイドは必要。老人が座るベンチや食事のとれる喫茶店やレストランも造って欲しい。エレベーターは必要だよ。年に何回か展示を入れ替えて欲しい。
- ⑤70代女性：早く造って欲しい。敷地は広くって欲しい。庭も作って、真栄里首里大屋子（マジドゥシナゴーヤー）の建物を復元して、お茶会や八重山の料理会、ミニ芸能ができたらいね。駐車場は広くって欲しい。喫茶店は必要。赤瓦を使うなら地元赤瓦を使ってください。それが、伝統文化を守

り育てるのです。

- ⑥60代女性：博物館行ったことはある。でも、行くたびに同じ展示で、年に何回か入れ替えて欲しい。入れ替えているの？ 市民はわからないよ。
- ⑦80代男：博物館、分かるさ。寄贈した品があるけど、どうなっているかな。見たいな。早く造った方がいい。でも、造るためのお金、石垣市あるかな。命が足りないな。
- ⑧80代男性：博物館、老人にはあまり必要ないが、孫の勉強のためには必要かな。自然を生かし、昔の稲や粟、ヤマイモ等の栽培、ウマ、ブタ、ヤギ、イノシシなども飼育できたら面白いと思うよ。
- ⑨80代女性：必要。那覇の博物館（沖縄県立博物館・美術館）を見ると、羨ましいさ。昔の炊事場の展示を見ると懐かしかった。老人も、自分たちの島の事を勉強しないとイケない。新博物館は、老人にも、身障者にもやさしい施設であって欲しいです。
- ⑩高校生女性：博物館入りにくい。イメージが古くて若者向きでない。造るなら明るい博物館であって欲しい。デジタル、ハイテクも取り入れたらメッチャ楽しい博物館になる。美術館？ 必要だよ。映写室や資料室、学習室も造って欲しい。自然系も充実させてください。
- ⑪60代男性：早く場所を決めて建設を始めて欲しい。子ども博物館のように大人対象の講座も開いて欲しい。文系だけでなく、八重山の自然を利用した自然系の充実ができたらい。韓国の民俗村のような施設もいい。海外の作家を招いての新潟の中之条ビエンナーレのような、野外展示も必要。桃原用昇さんの人間国宝の染織作品は工芸品でしょう。八重山に絵画ある？ でも美術館は絶対必要。

❖ おわりに

いただいたのは、そんな意見だ。博物館を早く造って欲しいという声は圧倒的だった。

宣言「私たちの 私たちによる 私たちの博物館」
早く造ろう。サー、今夜は大いに議論しよう！

世紀を超えたインタープリテーション

全日本空輸株式会社

石垣八重山支店長 木下省三

❖ 序

「筑波大学第一学群人文学類考古・民族学主専攻先史学コース」。今は呼称も変わってしまったが、学生時代、ここでの私の専攻は「アンデス考古学」であった。当時はよく「いい趣味ね」と言われたものだが何故、風変わりな(?)学問を選んだかという子どもじみているが「過去を知れば、未来を生きるヒント、力を得ることができる」と信じていたからである。実際、南米ペルーの現地調査にも赴き、その際に初めて乗った飛行機に感銘を受けたのが現在の仕事に就くきっかけとなったのだが、以来30余年たずさわった航空・観光と考古学・先史学にも親和性のある博物館について結びつける機会をいただいたことに感謝したい。

❖ 観光とインタープリテーション

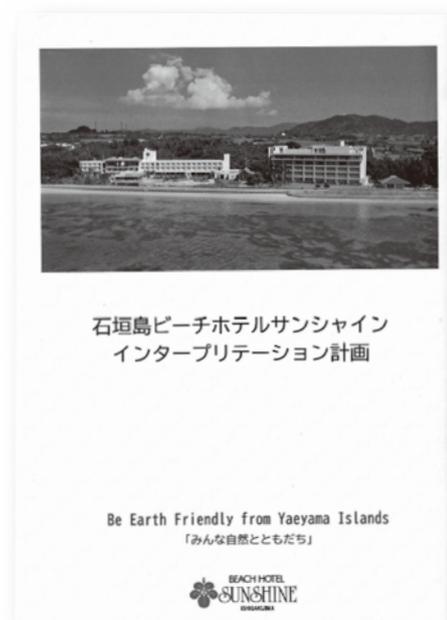
最近、環境省や観光関連・教育機関の活動に「インタープリテーション計画」との言葉をよく耳にする。実際には100年も前から提唱されているようである。Interpretationの直訳は「解釈」「通訳」だが「『インタープリテーション』とは自然や歴史・文化の魅力や価値を紹介し、地域と来訪者を結びつける活動です。自然公園や歴史遺産、観光地、ミュージアムなどで活動するガイドの仕事のなかで必要とされる技法であり、さらに資源の保全や観光の振興にも重要な役割を果たすものとして注目されつつあります。」(日本インタープリテーション協会ホームページより抜粋)のように昨今のオーバーツーリズムの顕在化にあって一層注目を集めている「コミュニケーション」ともいえる。

長崎県雲仙地区では来訪者に対して、自然景観の保全のみならず、食、歴史・文化などのカテゴリーにおいて各施設・事業者も一体となって「伝えたいもの(価値)」「ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験」の紹介も含むインタープリテーション全体計画(「雲仙温泉地区雲仙をもっと好きになるSTORY」-雲仙温泉らしさ-雲仙温泉ならではの価値をお客様と共有するために:一般社団法人 雲仙観光局)を策定しており、大変わかりやすい。

石垣市にあるホテル「石垣ビーチホテルサンシャイン」

は先日、宿泊施設としては日本初となるインタープリテーション計画を策定された。歴史あるホテルとして大切にしているもの、息づく自然環境・動植物、唯一無二の星空を守る工夫、経済活動との調和など具体的に目に見えるものを通して宿泊客と「コミュニケーション」を図っている。こうした取り組みの広がりによって石垣八重山の地が「インタープリテーション先進地」になっていくのは大変意義深いと感じる。

新たな博物館においても、多くの観光客の方が、この地で守り続けられる文化・伝統と今を生きる人々を知り、その背景にある悠久のストーリーを石垣島に到着したらまず学ぶ施設として、さらには前述した(過去を知れば未来がわかる)とおおり、歴史そのものが取り巻く環境変化の中で「守るべきもの」をどういった英知・技術で守ってきたかを示すものであり、世紀を超えて受け継がれる「コミュニケーション」だから地元の方々にとっても過去と現在、未来をつなぐインタープリテーションの主基地になっても良いのではないだろうか。



石垣島ビーチホテルサンシャイン様
インタープリテーション計画表紙

❖ 人口減少経済とアバター (多言語化・省人化・リモート対応)

コロナ前になるが人口減少経済の社会ではどんな変化が起こるのかといった書物が多数発行されていた。流通課題、専門性の高い人材の海外流出などとともに有名な美術館・観光名所などでも人材不足から開館時間が短縮され、予約制の導入から半年先まで予約でいっぱい。一方で総人口が減少し、入場料収入も伸び悩み、経営難に直面する多くの文化施設……そんな未来像を描くものが多かった。

航空業界でも喫緊の課題である人材不足に対して「DX化・省人化」を加速させていく流れが生じ、今の空港は10年前とは全く異なる装いになっている。自動で手荷物を預ける機械や24時間前からオンラインで可能なチェックインなど自動化・セルフ化の推進と人的サービスの集約が軸になってきた。旅客需要でも国内線は利用人口の減少に伴い、このままでは先細りとなるため、①新たな航空利用層の需要喚起としてのLCC展開 ②海外から日本各地の旅行で国内線を利用いただく(VISIT JAPANキャンペーンなどと連動)施策を展開してきた。

こうした中、人材不足と訪日外国人旅客への多言語対応を兼ねて遠隔操作が可能な自走式モニター(アバター)を活用した実証も行われた。この技術は後のコロナ禍においてはその他の技術ともども、例えば、接触できないご家族と入院中のご本人を結ぶツールとなり、美ら海水族館や他の美術館・観光地において自宅からのリモートツアーを支えるツールへ発展していった。

移動制限に伴う副産物ともいえるが石垣市の産業構造では第3次産業が約80%と観光業がリーディングインダストリーである。再びパンデミックの来襲により移動制限が生じた場合であっても新しい博物館では、こうした技術の導入などによりボラティリティリスク対応(変動性対応)を備えたものにしたい。



ANAホールディングス掲載 2020/3/23 web記事より

ただし、「オンラインツールの整備などの設備投資をすればよい」というわけではない。企業が事業持続性を強固にするため「金銭を介したコミュニケーション」(入場者、有料視聴者)を増やすことは必須であるがそこばかりに目を奪われるのではなく、「その周縁部」(ファン)をいかに厚くするか、に注力した日頃からのアクションが重要である。それが新たな需要を生み出す。

さらにこちらもある意味ボラティリティリスク対応であるが雨天時などでは、新しい博物館が島内の史跡や景勝地訪問の疑似体験ができるようなところになれば、来島者満足度はかなり高まるのではないだろうか。

❖ リアリティ・本物の持つ力

コロナ禍では移動制限に抗する「リモート」とともに非接触が求められ、いわゆる「バーチャル」技術の活用を一気に広げる結果にもなったのではないだろうか。「そこに行かなくても」「本物ではないが遜色ない」ものを手軽に楽しめることで、時間やコストの削減にもなる。実際に多くの企業で「リモートワーク」や「リモート会議」が定着し、新たな働き方にもつながった。実際、航空需要を見ても出張などのビジネス渡航はコロナ前に比べると80%を下回る水準にとどまっている。おそらく今後もビジネス需要は元の水準には戻らないといわれている。

一方で旅行需要、そしてVFR(Visit Friends and

Relatives：友人や知人、親戚を訪ねる）需要は移動制限の解除後に一気に回復し、堅調な需要を示している。画面越しではなく、その人の温かさ・息吹・香り、その場所で感じる風・光・影・土の匂い。そして本物だけがもっている不思議な力に惹きつけられる。決して美術に興味があるとは言えない私もオランダ・アムステルダムのファンゴッホ美術館に所蔵されている「ジャガイモを食べる人々：The Potato Eaters, 1885」を見た時には、その場から離れられないほど、その絵に描かれている時代や場所に吸い込まれるような体験をした。同様な体験は2022年に開催された東京国立博物館の国宝展でも三日月宗近の刃文は光を纏い浮かび上がってくるように感じた。バーチャル技術がどんなに進んでも超えられない本物だけが持つ力は存在すると思う。

「バーチャル・リモート」が進むと、実際に人が来なくなるのでは？との懸念に対しては心配する必要はない。「バーチャル・リモート」によって今まで以上に手軽に知ることができ、探求心を掻き立てられ、実際に訪れて「リアル」に触れる、こうした行動心理に対応できる新しい博物館であってほしい。

❖ No one will be left behind

唐突であるがSDGsの前文にある言葉「No one will be left behind」（誰一人取り残さない）や「Present and Future generations」（世代を超えて）はSDGsが目指す世界の本質を示すもので、好きな言葉である。

新しい博物館でも「世代を超えて、誰もが」楽しむことができ、冒頭記載した過去・現在・未来のつながり（コミュニケーション）を感じることができるものであってほしい。

正確なデータは持ちあわせていないが石垣島を来訪される外国籍の方はもしかしたら県内他地区よりも多様な国から来ているかもしれない。だからこそインタープリテーションの重要性も前述したとおりだが、バリアフリー化も含めて「誰もが」の前提は「EQUITY」（衡平）である。「すべての人に、平等な対応」をするのではなく、「すべての人が、同じように楽しむことができるようにする

対応」との意味である。例えば、多言語化を図る際に、すべての国の言語対応ができないから特定の言語だけにするのは不平等だから、来訪者が使用する言語の多い順に多言語化として理屈付けするよりは来訪者自身の携帯電話の翻訳レンズ機能を使えば十分意味が分かるような所蔵物解説文にするとか、段差のある場所にスロープを設置、ではなく、そもそも段差がなく、スロープのみの施設にするなどハード面・ソフト面にて御一考いただきたい。

私は博物館学の専門家でもなく、的外れなことをつらつらと述べたが、新しい博物館によって開かれる大きな未来を語りたい。そして博物館自体、私たちが守るべき、大切な宝物であることはしっかりと伝えたい。

新八重山博物館への思い

アンパル陶房

代表 宮良 断

私はこの十年ほどの間、石垣市立八重山博物館協議会委員を務めている。その中で、八重山博物館が直面している様々な現状を目の当たりにしてきた。特に重要な問題として、現在の博物館の老朽化が著しいこと、収蔵品に対して展示スペースが少なく、来館者に対して十分な展示ができないこと、また貴重な収蔵品の安全な保管に不安があることを知り、とても心配していた。

このたび、新博物館の建設に向けてシンポジウムが開催されると聞き、安堵すると同時に、これからの博物館がどうあるべきかを私なりに考えてみた。

あくまで私個人の理想であるため、予算や法的な可否は考慮せず、心に浮かんだイメージを述べようと思う。

❖ 石垣市立八重山博物館の認知度

私は陶芸家として活動しながら、八重山陶器の歴史に興味を持ち、現在は八重山古陶の復刻なども試みている。石垣島の陶磁器文化の深さは一言で語れるものではなく、原始的な土器から、瓦の生産、本格的な八重山焼の誕生まで、知れば知るほど感銘を受けるものだ。私の工房を訪れる人々の多くは、単に陶器が好きというだけでなく、八重山の文化全般に興味を持っている。そのため、私が八重山の陶器の歴史を話すと、とても喜んで聞いてくれるが、時折、次のような質問を受けることがある。

「あなたが話してくれたような八重山の陶器はどこで見られるのか？」

もちろん、八重山博物館に行けば詳しい解説付きで見られることを伝えるが、八重山文化に興味を持って石垣島に来た人が、八重山博物館の存在を知らないのだ。

多くの来館者はパソコンやスマートフォンなどで事前に色々と調べてくると思い、自分が観光客になったつもりで、「石垣島の陶器」「八重山の歴史」「石垣島の観光」などの検索ワードを試してみたところ、なかなか博物館のホームページにたどり着けないことが分かった。ホームページも、展示内容が十分に紹介されておらず、「行ってみたい」と思わせるには物足りなさがある。これはひじょうにもったいないことだ。せっかく

石垣の歴史や文化に関心のある人が来ても、博物館を訪ねずに帰ってしまうのだから。

もちろん、本土の大きな博物館のような充実したホームページを作るのは費用もかかるし、日々の更新も必要であるため大変だろう。必要なのは博物館で何を見ることができ、どんな情報が得られるのかを、シンプルにまとめたホームページである。(現在はPDFのパンフレットに簡単な説明が書かれているだけである。)

❖ 充実した遺跡の案内

石垣島は考古学的な遺跡の宝庫である。これらの遺跡について博物館では学芸員が丁寧に紹介しているが、エントランスなどに立体の石垣島の地図を設置し、主要な遺跡の場所を簡単な解説付きで表示すると、さらにわかりやすくなると思う(右写真は宮古島市総合博物館の例)。

❖ 資料と触れ合う場の提供

私は、年に一度のペースで小学生向けに陶器の製作体験を行っており、実演の前に簡単な陶器の歴史を解説している。パナリ焼や八重山焼の実物を子供たちに触ってもらおうと、難しい話に退屈していた子供たちも目を輝かせる。皆が「ひんやりしている!」「思っていたより重い!」と口々に感想を述べているのを見ると、触れることの大切さを改めて感じる。

一方で、展示品の多くはガラス越しに見るしかなく、当然だが手を触れることは禁止されている。しかし、見る人の気持ちとしては、展示品の質感や重さ、叩いた時の音など、直接触れてみたいと思うものだ。

可能な範囲で構わないので、触っても良い展示品(レプリカでも良い)を置くスペースがあれば、楽しさが増すだろう。例えば、エントランスにテーブルを設置し、その天板に島の木材(ヤラブ・センダン・紫檀など)を埋め込み、木の名前を書いておけば「触れる資料」として最適である。



❖ 八重山の自然環境を資料として活用する

八重山の素晴らしさは、博物館の展示品だけでなく、島全体が生きた展示としての価値を持っていることである。八重山の貴重な動植物や、津波石などの自然の力について、過去の企画展示では興味深い内容が多数あった。

これらの企画展も素晴らしいが、小さな島だからこそ、現地で直接観察できるものを積極的に紹介しても良い。例えば、野鳥観察マップがあればどうだろうか。アカショウビンの渡来する季節にはバンナ公園でその鳴き声を聞くことができ、カンムリワシは名蔵湾沿いでよく見かける。観察スポットとして、館内でマップを提供し、QRコードを使って動画で鳴き声や姿を見ることができれば、さらに楽しめるだろう。

他にも津波石のある海岸や、地質学的に興味深い場所もあるので、それらを案内するマップがあれば、その場所を訪ねたくなるはずだ。

可能であれば、紙のマップではなく、スマホでアプリをダウンロードすれば、「博物館が提案する島の見どころ」を解説付きで案内してもらえると、嬉しいと感じる。

❖ 映像資料の活用

八重山の年中行事は、豊年祭を筆頭に地域色豊かな

ものがたくさんある。これらの行事は一般の人でも見ることができるが、訪問のタイミングが合わない場合もある。このような場合に、館内で祭りなど地域の行事を映像として見られるのは、ひじょうにありがたいことだ。特に、石垣島は台風や長雨で外に出られないことがあるため、そのような状況でも「八重山博物館で地域文化の映像が見られる」となれば、旅行が台無しにならず、良い学習の機会にもなるだろう。

❖ まとめ

思いつくままにアイデアを書いたが、来館者が求めるものは、豊かな自然と深い文化を持つ八重山の魅力を、博物館が中核となって発信・連携し、多くのオプションを提供してくれることではないかと考える。

八重山の情報については、すでに多くの記事がネット上にあふれているが、意識的に調べないとそれらのサイトは見られず、誤った情報と正しい情報が混在している。そういった雑多な情報を博物館が選定し、より良い情報を優先して紹介できるなら、来館者が安心してそれらの情報にアクセスできる。情報が過剰な今だからこそ、正しい情報を選んで発信できる、主体性を持った博物館を目指すことが、その存在意義をより大きくすることにつながると思う。

自分を再発見する博物館

石垣市八重山博物館協議会

副会長 山根頼子

❖ 博物館建設準備室が設置された

2024年度、念願の博物館建設準備室が観光文化課の中に設置された。これまで八重山博物館協議会の話合いの中でも、新博物館の実現には具体的な準備室の設置がまず必要だという意見が何度も出ていたので、これは大きな一歩だと喜んだ。ところが担当課は博物館ではない。観光文化課に設置である。「はて?」。首をかしげてリサーチするとその疑問はまもなくとけた。国は、経済成長の牽引役となる産業は「観光」と位置づけ、文化と観光の共生をめざして文化観光を推進しているということがわかった。石垣市もその流れにそって設置したのだろう。

❖ こんな博物館がいい!

背景はともかく、一歩を踏み出したのでその勢いで周りの人に「どんな博物館ができたらいと思う?」と聞いてみるが多くなった。

「古いユンタの音源が聴きたい」「祭りや舞踊の古い映像をみたい」「方言の音源も聞いてみたい」。時には、「豊年祭の前には旗頭本も見てみたい」という若者もいた。

今や消滅の危機にある方言や古謡に音や映像資料で触れ、書物だけでは得られない発音などを目や耳で体験したいということなのだろう。映像は多くを語る資料だから、それを見て現在の活動に活かしたいという思いは文化継承への大きな力となり得る。頼もしい意見だ。

デジタルでの資料提供が容易になっている現在、オリジナル資料は大切に保管したまま、重要な資料を形を変えて市民に提供することは可能だ。展示だけでなく、アーカイブス機能も博物館には期待されていて、それを活用していきたいという意見だと理解した。

他に、ワークショップなども開催してほしいという声もあった。子どもに対しては遊びながら学べるような企画を、大人には「こども博物館教室」のようなやさしい内容の講座をやってほしいと。体験的であったり、展示品と利用者を結ぶために新しい切り口を提案してくれる、そんなしかけをしてくれる博物館が期待されているようだ。

❖ 大切なのは博物館職員の専門性と情熱

しかし、これらを実現するためには、「人」の力が欠かせない。博物館などの文化施設は、施設・資料・人、この三つの要素がそろって、はじめていい取り組みができる。なかでも特に「人」が重要だということを力説したい。「人」の知恵と情熱があれば少々の不足部分などは乗り越えることができるからだ。「人」とは専門知識をもった学芸員であり、前述したような企画をつくる教育・普及の専門職員のことだ。

また博物館には収蔵品の目録作成や保存管理など、表からは見えにくい基礎的な大切な仕事がたくさんある。それをしっかり構築しておかないと、収蔵品を十分に活かすことができない。前述のような市民が期待している博物館活動に応えるためにも、基礎は必要なことなので、市民も博物館職員の仕事を理解することが必要だろう。

❖ ネットワークでパワーアップする

とはいえ、維持費やマンパワーなど石垣市の財力や人材に見合った博物館はどれくらいの規模だろうか。沖縄県立博物館・美術館のような規模を望んでいるがどうだろうか。また石垣市、八重山だからできることはないだろうか考えてみた。

一つの提案としてネットワークをあげたい。新博物館をさらにパワーアップさせるために八重山全域の博物館・資料館がつながり、機能としての「八重山まるごと博物館」はどうだろうか。ちなみに八重山には、個人や学校の資料館もふくめ石垣市には19、竹富町11、与那国町4、合計34施設がある(休館も含む)。歴史的文化的にもつながりの深い台湾の博物館もネットワークに入れてもいいかもしれない。それぞれの館の特徴をふまえて棲み分けと情報共有をしたらどうだろうかということだ。

たとえば「八重山平和祈念館」は戦争・平和、「石垣市伝統工芸館」は織物、「八重山農林高校農業史料館」は農業、人物に焦点を当てるなら、「大濱信泉記念館」、「具志堅用高記念館」、自然科学系は「サンゴ村」や「国

立天文台石垣天文台」というふうに、新博物館はメイン博物館の役割をし、連動しながら相乗効果でパワーアップする。そんな新博物館を期待している。

❖ 博物館で何を見つける？

ところで人は何を求めて博物館へ行くのだろうか。「知りたい」の知識欲か。「温故知新」で過去から新しいものを創造するか。それとも「自分再発見」か。

黒潮に育まれた亜熱帯のサンゴ礁の島々からなる八重山。この風土から生まれた人々のくらしや、民俗芸能。辺境の地にあって幾度も時代に翻弄された歴史。それに

つながる自分を展示物や資料を見ることで、あらためて客観視することは「自分再発見」になるのではないかと思うことがある。たとえ異文化をもつ国内外からの観光客であっても、この八重山の自然と文化に自分を重ねると何か発見があるのではないか。

「私は何者だろうか」

人はいつもこの答えを探している。そして「人は自分の内側にあるものしか目に映らない」。だから博物館で目に映ったものは、内なる自分に他ならないのだ。新博物館では何度でも自分を発見したいものだ。

八重山の博物館・資料館

●石垣市

石垣市伝統工芸館
石垣市立八重山博物館
いしがき星ノ海プラネタリウム
石垣やいま村
大濱信泉記念館
具志堅用高記念館
環境省国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター
国立天文台石垣島天文台
国立天文台VERA石垣島観測局
佐竹利彦椰子記念館
しらほサンゴ村
高嶺酒造所
蝶館カピラ
みね屋工房
みんさー工芸館
八重泉酒造
八重山平和祈念館
八重山農林高校農業史料館
琉球真珠

●竹富町

西表野生生物保護センター
西表手仕事センター
西表島エコツーリズム協会
亜熱帯植物楽園由布島
黒島研究所
黒島ビジターセンター
小浜島民俗資料館
竹富島喜宝院蒐集館
竹富島ビジターセンター
竹富島ゆがふ館
竹富民芸館
波照間島星空観測タワー

●与那国町

アヤミハビル館
DiDi与那国交流館
与那国町伝統工芸館
与那国町民俗資料館

* 『八重山手帳2024』をもとに作成 (50音順)

新しい博物館に求めるもの

今回、新博物館建設準備室が設置された。これを機に博物館に関わりのある方々にお話をうかがった。

石堂徳一さんは元石垣市立八重山博物館職員で、今でも人気のある「こども博物館教室」を立ち上げた人物。退職後は「こども博物館教室」の講師も務めた。川平孝子さんは、石垣市教育委員会に勤務経験があり、過去の新博物館建設の紆余曲折を身近で見てきた。現在は石垣市立八重山博物館協議会委員を務めている。石垣久雄さんは、「こども博物館教室」の講師を長年勤め、博物館と子どもたちをつなげる存在だった。関わり方、立場も違うお三方に、新博物館建設に向けてそれぞれの思いを語っていただいた。

これまでの博物館と私

石垣 私の博物館との関わりは、教育関係に従事していた関係上、やはり若者が博物館を利用し、活用して、島の文化を学んで伸びてほしい、そういうようなことからですね。

たとえば発掘調査がされている時など、授業時間も「はい、今日は発掘現場に行ってみましょう。私たちの住んでいる地域にはこういったものがありますよ」ということをしてきました。

一番問題だったのは、石城山^{いしすくやま}。石城山がもう壊され始めていて、もう消滅したら大変だということで、少なくとも残ってる部分だけでも守ろうということで保存運動が進められていました。幸い、フィッシャー（石灰岩の裂け目）から鹿の骨が出てきたので私は高校生たちを連れて行きました。ここに鹿の骨があるということは、かつてここに鹿がいたという証明になるわけです。教科書で学ぶことももちろん大事ですけども、地元の現場に出かけて実物に触れて学ぶということはとても大切なわけです。あれから自分たちで地質学とか、歴史、文化などをいろいろ勉強していくようになりました。

そういうことで、若者に郷土の文化を継承し発展させていく、そのために大事なものは博物館。それをぜひ造ってほしいと。若者が本当に勉強しやすいように、また地元のことに関心を持って疑問を明らかにしながら自分の歩むべき指針

を見誤らないように、文化と歴史から学んでほしいと思って博物館に関わってきました。

いろいろ思い出もたくさんありますが、特に「こども博物館教室」、最初に必ず史跡巡りが第1回目の講座として入ってくるんです。バスに乗って石垣島一周して、島の歴史、文化を子どもと一緒に勉強できたことが何よりの私の大きな収穫ですね。

川平 私は現在、博物館協議会の委員を務めています。市の教育委員会に勤めていた頃から考えると、新博物館建設は私にとっては3度目の正直どころか、4度目、5度目ぐらいの正直のような気分がするんですね。

というのは建設場所を決めると言った時に、候補地の石垣市の第一苗畑もちゃんと現場を見に行きましたし、それから今の市役所の後ろの方からフルスト原につないで史跡博物館と一緒にしようかという話も出ていたので、どこに造るかというところまで一緒に見学させてもらったのですが、ほんとに、あれから何年経ったのだろうかと……。紆余曲折ではなくて博物館に関しては行っては止まり、行っては止まりという状況が私の中にありました。

その後、退職して協議会の委員に入れてもらったのですが、それまでの私の中の「博物館」というところは本当に恥ずかしい話ですが、古いものを置いておくところ、飾っておくところが

博物館だったんです。ところが、それからどんどんいろんなところの博物館見ていくうちに、そうじゃない、どういう博物館を私の中での理想とするのかを考えるように変わっていきました。

委員になっていろいろなものが収蔵庫にも倉庫にも所狭しと並んでいる様子を見た際に、この預かったもの発掘したものは、いつ日の目を見るんだろうか？^{いにしえ}古の人たちが使っていた、文化であり、芸術であり、工芸品であるそれが、いつ今の人の目の前に出ていくのか？ これらが本当に博物館で展示される時代が来るのか？ ということを非常に危惧したことを覚えています。

今の子どもたちが「博物館に遊びに行こうよ」という意識を持つような博物館をいつ造ってくださるのか、いつできるのか、私の中で博物館がずっと遠くになっていってしまっているというのが現実でした。

しかし、新聞で博物館基本計画策定委員が発足したという記事を見て、近づいてきたな、お願いだからまた遠ざかってくれるな、というのが今の気持ちですね。

石堂 僕は昭和51年に教育委員会に入りました。それまでは文化財担当者はいなかったものですから、担当をつくるということで、入りました。博物館は昭和47年(1972)設立ですから、その時にはもう出来ていました。

復帰してちょうど10年。博物館10周年の時に博物館に異動になりましたが、その時点で博物館にはどんな資料が何点あって、どれだけのものが収蔵されているのか全く把握できていませんでした。そこで1年間ですべて収蔵品台帳に登録をなささいという指示があって異動になったわけです。

1年間、全職員、出張もなし、部屋の中に1年間こもって、収蔵品を測って、写真を撮って、台帳に写真を貼って、これをずっと続けました。

博物館の機能というのは、資料収集、調査研究、公開、これが3本柱。しかし、資料収集したけれどデータがないという状態が10年間あったものだから、これを1年間でやりなさいと。これが僕への特命事項だったんです。で、1年で終わりました。それで沖縄県第2号の登録博物館になったんです。

そうしたら、もう来年からなんでもできるから、そこで僕は「こども博物館教室」を始めたんです。

そう、博物館が出来て11年目。予算も一銭もない、計画もない、それでも当時の玻名城泰雄館長に「お金はないけど、僕はやりたい」と言って始めたんですよ。そして募集したら100名生徒が集まった。で、11回講座だから11名の先生を探さないといけない。講師が11名で受講者100名だから、1クラスでは間に合わなかったので2クラスつくりました。講師の先生にも月に2回、同じ内容を2回やってもらいました。もちろん予算はないから謝礼金がありません。ボランティアです。1年間やったんですよ。そうしたら2年目からは予算がついて、現在まで40年以上続いているわけです。僕は5年目まで担当したかな。後は他の人が引き継ぎやっていますけどね。

なぜ、「こども博物館教室」をつくったかという、昔は博物館の敷居がとにかく高かったんですよ。もう、えらい先生がいるようなところってみんな思っていたわけ。中に入るのも入りきれなかった。僕なんかも大学生の頃、入りきれなかった。そこで地域に開かれた博物館にしたかった。そこでまずは、未来の八重山をつくる子どもたちを育てよう、そして「学ぶ」ということを重点的にやっっていこうと思ったわけです。

ところが、教育委員会に異動になった年、「こども博物館教室」の人気がありすぎて定員オーバーになって、受講できない子どもがではじめた。なんとかしてくれと保護者たちに言われて教育委員会で「文化財愛護少年会」をすぐにつくりました。これも初めは予算なし。すぐつくったから。でもこれも1年後にまた予算がついた。こういうふうには、これがやりたいという強い意志があれば、お金がないからできないんじゃないって、お金がなくてもアイデア次第でできるものがたくさんある。市民の協力さえあれば。支えてくれる人がたくさんいるわけです、周囲には。

そういうことで「文化財愛護少年会」もまた面白かった。もう自由だから。3泊4日の旅とか、歩いて島1周したりね。食事は父兄が朝昼晩、行き先で待機して作っているとかね、楽しかったな。

ある時は昔の道を行くということで、仲筋から川平までの道をつくるために職員の下地傑と2人で3日間かかって伐採して、それで子どもたちを歩かして、とにかくこんなことやってましたね。で、僕は、やっぱり将来の八重山を担う子どもたちを中心に考えたわけ。だから僕はもう、調査研

究する暇はなかった。もう環境の整備だけ。子どもたちが学ぶ環境をつくる、これだけで、ほんとに勉強する暇もあんまりなかった。僕は先生方に頼みに行って、先生たちが子どもたちにみんな教えてくれるから。そういう子ども中心に博物館を僕は考えていました。いや、もちろん大人もちゃんとやらないといけません。今後は外からも観光客もたくさんいらっしやいますよね。そういうことも考えながら、国際色豊かな博物館、今回そうなっていくでしょう。地域や社会、国際的にも開かれた博物館づくりというのが必要だな、と考えていますね。

観光と新博物館

石垣 新博物館建設は、もう何度も何度も、できるかなと思ったらまた遠くなったり。本当にもう市民にとっても新博物館は縁遠くなっていたわけで、今度もまた掛け声だけで終わるんじゃないかというようなね、ほんとに冷たい目で、博物館だけじゃなくて文化行政そのものに対してもね、もうみんな「あがや〜」となってですね……。

川平 私の直近の夢は孫と恐竜博物館に行くことなんです。ですから、私がさっき話したような博物館イコール古い昔の、もう…なんだこりゃってというようなモノを置いておくような所という時代からは、変わってしまっているんです。今、観光とドッキングという考え方になってきているのは時代の趨勢であって、私の中では新博物館というのは、沖縄県立博物館・美術館のように、美術品も展示する施設ということで、今回、お話させていただいています。

私のように「やっぱり恐竜だ、福井県立恐竜博物館に行こう」という気持ちは、多くの人々の中に同じようにあって、その展示は福井の人たちだけのものではなくて、日本のあちらこちらからも観に来る、海外からも観に来るという状況の中、インバウンド施策も一緒にやっていると、博物館という箱物自体の運営が成り立たないだろうと思います。

石垣でも、例えば桃原用昇さんが新博物館が出来たら貴重なコレクションを全て寄付しますっ

ておっしゃってくださっているわけですから、それを観に世界からも人が来ることが期待できるのに、今この時期を逃すようであれば「もう博物館はいりません。もうつukれないでしょ」という諦めの境地に入っていくんだろうな、少なくとも私が生きてる間は金輪際、望めないだろうなというところまで新博物館に対する今の期待は非常に大きいです。

石垣 新博物館の中身の問題ですが、石堂くんが話したように、やはり国際色豊かな博物館、これはもう観光ともリンクしていくわけです。これを目指して頑張らんといかんな、と。

私事ですが、私は竹富島で観光客を相手にジュースを提供して島の歴史を語る「軒下のゆんたく休み所」をするようになっていまして、そうしたら観光客がたくさん来る、ほんとに。もうフランスからも来てスイスからも来て、それから、中国からもロシアからも来てました。ほんとにいろんな方が来て、で、どうやって意思疎通するかというと、スマホの翻訳。これで綺麗にできる。こっちが思ってること、あっちが思ってることを伝え合い一応交流はできます。こういうような時代に入ってきてるなということをもう実感しておりますので、国際色豊かに、そして人類の文化を豊かにするために、それぞれの地域の博物館を本当に実のあるものにしていかなければならないというのが今の思いです。

これからはね、観光とリンクさせていく。もちろん地元の文化をちゃんと守って発展させていかなければならないけれども、こういったところにはこういう文化がありますよというのは、これはもうその地域に住んでる人の誇りですよ。ちゃんとやるべきだ。

川平 今、クルーズ船で石垣に来る海外の方たちもいっぱいいますでしょ。石垣に来て何を見るのかなってというのは非常に不思議なんですよ。たまに私が桃林寺でお茶(茶道)をやっている時に観光客が来て見ていかれる様子を見てみると、わずかな時間ですよ。本当にわずかの時間で、境内を自由に歩いていろんな石碑を見て、ご朱印を書いてもらってそのまま戻っていく。それを見ていると久雄先生がおっしゃったように、

八重山の誇りってなんだろうと考えざるを得ない。私たちのずっと前のご先祖様たちの暮らし、文化、それからこの生き様というのを、ある一つの館の中で、これが八重山ですよという誇りを持つものをつくると、観光で海外からいらっしゃる皆さんが、ああ八重山ってこういう島なんだな、こういう風にしてどんどん発展してきたんだな、というのがわかる館というのが、やっぱり必要なんですよ。それは必ずしも観光客だけのものじゃなくて、私たちがご先祖様を、古の皆さんを大事に思う気持ちがあれば、私たちにとっても同じぐらい必要なものだと思います。

例えば私たちはお家でお仏壇にご先祖様に手を合わせますよね、ありがとうございますと。そういう人々の気持ち、しきたり、生活の営みがわかるっていうのは、やっぱり博物館じゃないと。そういうことをやらなくなったお家もいっぱいあるので、それを残していくことが博物館の役目であり博物館に求めるものであって、さらには、ただ残すだけじゃなくて、これからの時代に開かれたものにしていく。美術品であり工芸品の新しい世界のものを持ってきて展示していくことなど、これからの子どもたちを育成していくための大きな役目が博物館にはあると思います。

人づくりの大切さ

川平 私が博物館協議会委員になってすぐに提案したのは、以前に「こども博物館教室」を体験したOBたち、この何十年間で大勢いるわけですから、かつて受講された方たちが子ども向けであれ大人向けであれ博物館教室の講師を務めるというシステムはできませんか、ということでした。社会教育の上でも「こども博物館教室」を40年以上続けてきたという意味を一つの形として残すためにも。

石堂 実際にすでに講師をしている人もいるし、大学の先生になっている人もいるし、人材はたくさんいますよ。

石垣 例えば祭りに参加した人は、また祭りの時期が来るとこれを思い出してまた参加するようになるんですよ。体で感じているということはこういうことであって、祭りの日が近づいてくると、もう

いてもたってもおれなくなるんじゃないか。ですから「こども博物館教室」でこれだけいろいろ勉強して、そして今社会人となっているけども、一体このことがどういう意味を持っていたかということをも本人たちが一番わかると思うので、「こども博物館教室」の卒業生が集まって参加し始めれば、新しい方向性も生まれてくるのではないかな。

川平 今の人たちが博物館に足を運ぶ回数よりは、「こども博物館教室」を体験した人たちが当時の1年間で足を運んだ回数の方が多し、心が入ってるわけよね。だから、これからできる博物館についても、私たちが思うよりもっと価値がある、興味のある、望みのある博物館構想がこの人たちから出てくるんじゃないかなと思う。

石垣 その時はなんでもなかったよう思っていたけれども、大きくなってくるとこういう意味があったんだっていうことがわかってくるし、我々市民にもこれから育ってくる人たちにもいいことを教えることができるんじゃないかな。希望がある。誇りがある。誇れる宝がある。それを伸ばしていく力がある。そういったことでもって未来をね、喜んで語れると思うしね。

川平 提案としてもう一つ。もうそろそろ、お家の中の大事なものが無くなってきていますよね、うちもそうだけれど。世代交代があり、建て替えをやってね、そこにあった昔の大事なものはもう土の中か灰になって無くなってます。だったら捨てずに、うちの大事なものですと博物館で市民みんなの前に出せるようにしていくと、大人も「博物館っていうのは私たちの身の回りの大事なものを受け継いでいくところじゃないかな、博物館に行ってみよう」という意識を自然に持つようになるのではないかと。

おそらく、市民の中で博物館に1回も行ったことない人が結構いると思うんですよ。そういう人たちが博物館っていうのはこういうものなのか、そこに行けば何か面白いものが発見できる、というようなものがないと。やっぱり観光のためだけの博物館ではないので。この島にいる人、生きている人たちが、博物館に行けば昔の自分たちのじいさん、ばあさんの時よりも、もっと古い時代のことがわかるんだよ、と。

今、^{りょうぐびん}霊供盆がわからないから霊供盆のことをやってという希望もたくさんありますよね。昔の人たちが霊供盆をどういう風にやってきたかということは、古くて新しい問題でもあるわけです。そういうことも博物館に行けばわかるよ、というような市民の生活に、私たちの生活に非常に近い惹きつけられるような博物館をぜひつくっていただきたい。そういうことを進めていくためにも「こども博物館教室」のOBの方々が大事であり、これからの博物館に占める役割は大きいのではないかと思います。

石垣 「人づくり」これが非常に大事だということを今聞いて思うんですが、新しい博物館に求めるものも、結局、専門性だけではなく横の連携をとることが必要だと。

今やもう私は考古学のオーソリティ、私は芸能では…と、それぞれ自分の専門では深く狭くずーっといくかもしれないけれど、では横への広がりという面ではどうか？ 庶民というのはそういうものではないでしょ、生活だから。そういう意味では、やはり子どもも大人も一緒になって我々の先祖が残してくださった文化を継承し発展させて豊かな地域をつくる人になろうということで、祭りも大事だし、この人づくりをどうするかということが大きな課題になっていくと思います。

博物館職員以外にも周囲にサポートする人間がいて幾重にも友の会があったりとか、いろんな人が、地域が、博物館を支えられるようになるといいかもしれないですね。祭りを成功させるはためにいろんな人員、役割があるでしょ。いろんなシユクブン（職分）があるでしょ。こういった仕組みをつくって、我々の地域の文化を宝を引き継ぐためにどうやればいいのか、それぞれの考えを出し合ってやっていく必要があるんですね。ですから、学校教育との連携、それから公民館との連携、こうした横のつながりが出てくると思うんですよ。今はこれがない。

やっぱり人づくりです、もう究極は。アイデンティティですよ。私を育ててくれた親、地域、いろんなものが凝縮されてると思います。これを解き明かしてくれるのは、やはり博物館であり、図書館であり、またいろいろな祭りであり、村の行事であり、というふうにつながっていくんですよ。

川平 人間はどこに行っても、外国に行っても、同じ風景を見ていても、見えるものと見えないものがあるって、自分のアイデンティティの中にあるものしか拾っていないという面があるといいます。

遠くから来た人はこの八重山の文化の中にそれぞれ自分の地域やアイデンティティにつながるものを見るのかもしれないと思ったら、これからの博物館というのは、私たちが自分のしてきたことを残せばいいんじゃないかって、世界のどこかにつながってる何かがその博物館にある、もちろん地元の生活もそこにある、昔の私たちが使っていたもの、お家で大事にしてきたものは無くなったけれども博物館にはこれが一つのストーリーとして残されている、ということが重要なのではないかなと思うんです。ですから本当に早くつくってほしいですね。そのうちに大事なものはみんな無くなってしまいますよ。とても悲しいことです。物を保存するということはたいへんなお金がかかることで、個人の手には負えないですよ。ですからやっぱり、公の機関がすべきだと思うし。

石垣 石垣の南嶋民俗資料館も竹富の喜宝院も個人での運営は厳しく、今は休館状態ですけども、文化的にはたいへんな貢献でした。

求めるだけではなく、何ができるのか

川平 さっき私が言った霊供盆は博物館の学芸員は作れないかもしれないけど、人材リストがあれば、じゃあいついつこの人を呼んでやりましょうね、ということが出来る。建物だけが博物館じゃない。島全体が博物館、どこにでもそれを体験できる機会があるよ、それが一つに集約された箱物が博物館であって、実は島全体が博物館ですっていうのは素敵じゃない？

「新しい博物館に求めるもの」というテーマですけど、求める一方じゃなくて、市民が博物館に何ができますかっていうことも大事で、ただ受け身ではなくて「私はこれができるけど」っていう市民の力を結集する博物館があってもいいと思う。

古から未来へつなぐための建物だっていうこと、自分たちのものだっていう意識がないとね。

これまで新しい博物館が出来なかったっていうのは、市民に「自分たちの博物館が欲しい」という本気度が足りなかったっていうのも原因の一つとしてあると思う。博物館は自分たちが行ってもそんなに面白いものじゃないという意識があるのじゃないか、面白かったら行くと思うよ。

石垣 今の博物館自体が自分の人生の琴線に触れない。触れさせるような工夫をしないといかん。

川平 自分の人生の琴線に触れるものを市民が博物館に求めている。求めているのか、知らないのか。だから、自分たちの博物館も早くつくってください、ぜひつくってください、という熱が、熟していなかったというのがこれまで延びてきてしまった原因の一つかなと私は思う。

石堂 博物館と教育行政との連携をどうするかということも、新しい博物館に関して考えるべき。博物館でもやっぱり芸能の振興、昔の資料を集めて調べたり、復活したりということも本来必要だろうと思うけども、一般的に博物館の機能の中にこれは入ってないね。教育委員会がすべきものだという気持ちがあるものだから。博物館もそういうことをやってもいいのではないかな。博物館構想の中でどのような形で包括的に取り組んでいけるのか。教育と文化の接点も弱くなっていると思うし。

川平 学芸員の資格を持ってる人が専門的に博物館に配属されてるかということと必ずしもそうでもない。その人たちは一生懸命勉強して資格を取ったんだから、博物館に関する仕事もやりたいと思ってるだろうに、なんで他のところに配置させるかなっていう人事も疑問。学んで入ってきたんだから、学んだものを市民に教えていくような人材をそこで確保していく必要がある。今ネットで他府県の学芸員募集なんか載るけれど来ないですよ。石垣も募集してるけど来ないでしょ。だから、今いる学芸員をもっと大事にしてほしい。新博物館の建設に絡めて専門職として採用するとか。

石堂 今回、新博物館の建設をぜひ実現させるための市民の機運はどうやったらつくれるのか。例えば建設候補地として3カ所、案が出ているので、そこをみんなで見に行って市民の意見聞きましょう、とか。

川平 例えば、公民館の館長さんたちだけ集めて話を聞く。それから老人会にも聞く。青年会には、あなたたちが望む博物館っていうのはどういうものですかと聞く。それから子どもたちを集めて、博物館ってあんなもある、こんなもある、夢がいっぱいあるんだよ。あなたたちは石垣にどういう博物館があったらいいなって思うのって、そういう個別の聞き取りをするのもいい。

今は石垣の旧家に残っていた紅型びんがたの幕とかもまだあるわけ。でも、あと何年かしたら、これもみんなもう無くなってしまうと思う。価値をわからなくて、ただ邪魔だからといって捨ててしまわれないうか、ほんとに心配。

文化は人がつくる

石堂 博物館はフルスト原の整備構想と一体化して造るべきだという考えが前からあるけれど……。

石垣 観光施設としてね。このフルスト原周辺の歴史を散策できるというね。

石堂 長崎の原爆資料館に行ったけれど敷地はフルスト原と同じぐらいだなって思った。すごく広い。向こうも憩いの場所になってる、建物以外は。

石垣 建物自体はね、何も大きいだけが能ではないですよ。本当に魂が通じ合うような博物館づくりでなければならない。新しい博物館に求めるものは規模ではなくて人、人の魂。自分たちの文化に誇りが持てるような博物館にすることですよ。

川平 人がいたから、文化がある。新しい博物館に求めるものは「人」。

石垣 博物館は我々の精神的なね、魂のふるさとだよ。

■ 「博物館」とは—博物館の定義、機能—

1. 博物館をとりまく潮流

改正前の博物館法

※昭和26（1951）年制定

- ・ 歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（公民館及び図書館を除く。）のうち、地方公共団体、民法（明治29年法律第89号）第34条の法人、宗教法人又は政令で定めるその他の法人（独立行政法人を除く。）が設置するもので登録を受けたものをいう。
※下線部分は改正博物館法において変更された
- ・ 社会教育施設として、資料の①収集・保管②展示・教育③調査・研究を行う機関
- ・ 博物館の基本的な役割・機能を確保するため、博物館の登録・相当施設の指定を制度化
- ・ 学芸員等の専門的職員の人材養成を推進

課題

●博物館に求められる役割・機能の多様化・高度化

- ・ デジタル技術等を活用した新しい鑑賞・体験モデルの構築
- ・ まちづくり・国際交流、観光・産業、福祉等の関連機関との連携（文化芸術基本法）
- ・ 文化観光拠点施設、地域文化財の計画的な保存・活用（文化観光推進法、文化財保護法）

●設置形態の多様化

- ・ 地方独立行政法人立（2013年）、会社立など設置形態が一層多様化

社会的背景

●文化芸術基本法 [2017]

- ・ 文化芸術の範囲を拡大し、まちづくり・国際交流、観光・産業、福祉等との連携を範疇に

●文科省設置法の一部改正 [2018]

- ・ 博物館行政を文化庁が一括して所管

●ICOM※京都大会 [2019]

- ・ 「文化をつなぐミュージアム」として、博物館を文化観光、まちづくり、社会包摂など社会的・地域的課題と向き合うための場として位置づけ

※International Council of Museums：国際博物館会議

博物館法の改正 [令和4年改正、令和5年施行]

①法律の目的及び博物館の事業の見直し

- ・ 目的に文化芸術基本法の本質に基づくことを追加
- ・ 博物館資料のデジタルアーカイブ化を追加
- ・ 他の博物館との連携、地域の多様な主体との連携・協力による文化観光など地域の活力の向上への寄与を努力義務化

②博物館登録制度の見直し

- ・ 設置者要件を法人類型にかかわらず登録できるように改正
- ・ 資料の収集・保管・展示及び調査研究を行う体制等の基準に適合するかを審査
- ・ 登録審査の手続き等の見直し

③その他の規定の整備

- ・ 学芸員補の資格要件の見直し
- ・ 研修の対象に、学芸員以外の者も含める
- ・ 指定施設の他の博物館等との連携等を努力義務化
- ・ 既に登録されている博物館は施行から5年間は登録博物館等とみなす経過措置

2. 改正博物館における博物館の定義

改正博物館法^{*}における博物館

※昭和 26（1951）年制定、令和 4（2022）年改正

- ・博物館とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を**収集し、保管**（育成を含む、以下同じ）し、**展示**して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、**その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い**、併せてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関。
- ・法人類型にかかわらず登録できるように改め、地方独立行政法人立、会社立などの登録も可能となった。
- ・改正博物館法において、博物館が行うとされる事業は下記の通り。

- ①実物、標本、模写、模型、文献、図表、写真、フィルム、レコード等の**博物館資料を豊富に収集し、保管し、及び展示すること。**
- ②分館を設置し、又は**博物館資料を当該博物館外で展示すること。**
- ③博物館資料に係る**電磁的記録を作成し、公開すること。**
- ④一般公衆に対して、**博物館資料の利用に関し必要な説明、助言、指導等を行い**、又は研究室、実験室、工作室、図書室等を設置してこれを利用させること。
- ⑤**博物館資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと。**
- ⑥**博物館資料の保管及び展示等に関する技術的研究を行うこと。**
- ⑦博物館資料に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の**報告書等を作成し、及び頒布すること**
- ⑧博物館資料に関する**講演会、講習会、映写会、研究会等を主催し、及びその開催を援助すること**
- ⑨当該博物館の所在地又はその周辺にある文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号）の適用を受ける**文化財について、解説書又は目録を作成する等一般公衆の当該文化財の利用の便を図ること**
- ⑩社会教育における学習の機会を利用して行った学習の成果を活用して行う**教育活動その他の活動の機会を提供し、及びその提供を奨励すること**
- ⑪学芸員やそのほか博物館の事業に従事する**人材の養成、及び研修を行うこと**
- ⑫学校、図書館、研究所、公民館等の**教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を援助すること**

●新たに位置づけられた事業

- ①**デジタルアーカイブの作成と公開**
- ②博物館で働く**人材の養成や研修の実施**
- ③**博物館相互の連携協力や、博物館以外の各種団体や施設との連携協力によって教育や学術及び文化の振興を図ること**
- ④**文化観光や国際交流、福祉や産業など多様な分野での活動を推進することで、地域の活力向上の寄与に努めること**

参考：文化庁 博物館総合サイト <https://museum.bunka.go.jp/>

博物館の定義、機能、博物館法改正の概要、日本の博物館の歴史、活動や現状等について、わかりやすく紹介されています。全国の登録博物館・指定施設の紹介もあります。石垣市立八重山博物館は登録博物館であり、「沖縄県」の最初に紹介されています。

基本的な考え方

●背景と意義・目的

現博物館の現状と役割および問題点と新博物館に求められる課題は、以下の通り。（平成 10 年 3 月時点）

<p>施設概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構造 : 鉄筋コンクリート平屋 ・敷地面積 : 1,772.07 m² ・延床面積 : 644 m² ・その他 : プレハブ収蔵庫（2 棟） 民間借入収蔵庫 <p>入館者の傾向</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入館者数は安定しているが微減傾向 ・大人の利用が多い ・観光客が入館者の多くを占める <p>石垣市民の意識の変化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市民の学習ニーズの高揚 ・市民の自然保護・環境保護意識の高揚 ・市民の郷土文化への誇りの高揚 	<p>果たしてきた役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ・史・資料の散逸防止、収集保管 ・教育普及活動の展開 ・特別展・企画展の開催による展示活動の充足 ・市民への開放 <p>抱えている課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・床面積が狭く、展示スペース・保管庫などが十分にとれない ・駐車場の位置がわかりにくく、存在しないに等しい ・敷地の拡張が不可能 <p>石垣市をとりまく社会情勢の変化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観光の動向-重要な産業として台頭、 求められる学習型観光への一部転換 ・研究の進展と展示技術の進展
---	---

新博物館に求められる意義・目的の整理

1. 新博物館に求められる課題
 [①新博物館建設の背景をふまえる/②社会の変化への柔軟な対応が可能な博物館/③小さな子どもから高齢者まで、初心者から専門家までに対応する博物館/④アジアを視野に入れる博物館/⑤科学技術・展示技術の進歩への対応を行う博物館/⑥ネットワークの構築を可能にする博物館/⑦亜熱帯・熱帯学習型観光を創出し、それに対応する博物館]
2. “日本最南端の自然文化都市”にふさわしい博物館
3. 国際化社会の到来、21 世紀の到来にふさわしい博物館
4. 最近の博物館建設の動向と新博物館 *テーマ型ミュージアムの隆盛/博物館のアミューズメント化をふまえた総合博物館
5. 新博物館建設は八重山の町なみや自然も含めて八重山全体を根本的に見直す契機

●基本的な性格

<p>1_学習機能・調査研究機能・情報機能</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.市民参加による、市民の学習意欲に応える博物館 2.アクティブに、かつ、楽しみながら学べる博物館 3.情報提供の場としての博物館 4.調査・研究の場としての博物館 	<p>2_人的交流促進・拠点化</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.<石垣島を中心に八重山全域を一つの博物館>とする視点をもつ博物館 2.人々の交流の拠点となる博物館 3.八重山の観光に<学習型観光>を折り込む博物館 4.八重山における各分野のセンター的役割をはたす博物館
<p>3_新博物館の個性化・独自性</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.市民がくつろげる憩いの場としての博物館 2.個性的で、誰もが訪れたい博物館 3.建築技術、その他の技術の粋を集積し、 景観に配慮する博物館 4.「工芸の里」構想との一体化を実現する博物館 	<p>4_自然との共生・未来への展望</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.自然との共生を考える博物館 2.「市民の森」構想などとの一体化を実現する博物館 3.八重山の未来を展望する博物館

●基本理念

アジアのなかの八重山

1. メインテーマ「アジアのなかの八重山」

- ・石垣島は、東アジア・東南アジアの結節点の一つ
- ・石垣市、ひいては八重山がいかにして現在の姿に至ったかを、人文科学系、自然科学系に加え新たな研究分野を総合的に取り入れ、具現化し、可能な限り客観化して「アジアのなかの八重山」を展開する

2. サブテーマ

- ・「海・島・空」：人文科学系と自然科学系に共通するテーマ
- ・「自然と人間の共生」：郷土八重山の自然の特性を示しながら、護り育てる心をはぐくむ
- ・「生産・信仰・祭・芸能」：それぞれ密接に関連し、八重山の民俗的風土の基層を形成
- ・「情報の受容と発信」：幅広く情報を収集・蓄積しながら、国内外とのネットワーク化を推進し情報発信する拠点、八重山の未来を主体的に創造する拠点、八重山独自の文化を形成し発信する拠点として機能

3. 基本コンセプト

ミュージアム・パーク・八重山

- 地域に根ざし、地域に学び、地域に奉仕する博物館
- 八重山の自然・歴史・文化を体験しながら、アジアのなかの八重山を知るテーマパーク的な知的なエンターテインメント施設
- 展示資料、調査研究、普及活動、施設など各面において常に成長し続けるミュージアム
- 市民・群民・観光客の憩いとくつろぎの場、交流の場となるアミューズメントパーク
- 環境と調和し、環境を再生・継承・発展させるエコロジーパーク
- 研究者・専門家のニーズにも十分対応できる学術交流センター

●新博物館のあり方

1. 利用者の想定

市民・群民、国内外からの来訪者、研究者・専門家などの利用が想定される。さまざまな利用者層に向けた、多彩な要素を用意。特に、次世代を担う子どもたちや生涯学習の一環としての利用者の活用に留意する

2. 開かれた博物館

多くの人々に利用されるよう、来館者の属性に合わせたきめの細かい対応を行う。施設整備の面だけでなく活動内容についても誰もが楽しめるよう、開かれた博物館としていく

3. エコミュージアム（生活・環境博物館）の考え方

「一定の地域を博物館として捉え、文化的資源として活用するとともに後世に保存・伝承していく」とするエコミュージアムの考え方に立ち、「八重山のすべての島々を博物館に」という視点から活動を展開する

活動と事業

●基本的な考え方

- ・新博物館建設用地背後にある前勢岳の自然を守りながら公園化する「市民の森」構想、八重山の伝統産業である挽物、織物、焼物に関する「工芸の里」構想、近隣に位置する県営バナナ公園との有機的なつながりに配慮して活動と事業を検討する。
- ・展示、教育普及、調査研究、収集保存の4つの基本的活動に加え、充実した利用者サービスおよび企画開発・管理運営活動を行うことで、より一層の個性化をめざす。

●活動の種類

<p>収集保存</p>	<p>史資料の収集、分類・整理、保存、収蔵を行う。</p> <p>1_収集 ・館の収集方針に基づいて実施。一般からの情報及び史資料の提供を積極的に受け入れる</p> <p>2_分類・整理 ・史資料および情報のデータベース化を図る</p> <p>3_保存処置 ・史資料に応じて適切な保存環境を設定し、劣化の進行を防ぐ処置および修復を施す</p> <p>4_収蔵 ・高温多湿や塩害といった八重山の自然環境に配慮する。また、収蔵資料の検索システムを整備する。収蔵庫は将来拡張できるような機能および構造を持たせる</p>
<p>調査研究</p>	<p>博物館事業のなかでも基盤となる活動で、その成果を展示活動や教育普及活動などへ反映させ、利用者へ還元していく。</p> <p>1_新博物館のテーマに関する調査研究活動 ・“アジアのなかの八重山”に基づいた、総合的かつ学際的な調査研究を行う ・環境保全・保護にかかわる調査研究を行う ・外部との積極的な連携を図る</p> <p>2_博物館活動に関する調査研究 ・展示の効果測定やアンケート調査など、展示および教育普及に関する技術的研究を行う ・八重山の自然環境をふまえた保存技術および保存科学に関する調査研究を行う</p> <p>3_調査研究の種類 ・館の自主的な研究 ・館が主催する共同研究 [市民参加、大学・研究機関、沖縄県立博物館をはじめとする内外博物館] ・他が主催する共同研究への参加 ・受託研究 ・委託研究</p>
<p>展示</p>	<p>収集保存、調査研究した史資料を展示テーマに応じて展示し、広く一般に公開。教育普及活動と連携しながら多様な来館者に対応できる展示を展開し、市民の学習意欲に応える。</p> <p>1_展示の基本的な考え方および種類と構成 ・屋内展示と屋外展示から構成。どちらも常設展示・非常設展示を検討。移動展示も行う ・来館者それぞれの属性に対応した、誰もが楽しめる展示・開かれた展示を行う。特別展や企画展などの企画・実施には、一般市民の参画を検討。バリアフリーにも対応する ・実物展示と参加体験型展示とのバランスに配慮する ・動線・視線・色彩・照明計画を立て、効果的な展示を行う</p> <p>2_展示活動の将来計画 ・展示更新を随時行い、展示の充実・市民ニーズの充実・リピーターの確保を図る ・展示スペースについては、将来拡張できるような機能および構造を持たせる</p>

<p>教育普及</p>	<p>市民に生涯学習の場と機会を提供し、その学習意欲に応える。来館者と館スタッフ、そして来館者同士の交流の場としても機能する。他施設あるいは展示活動との連携を図る。</p> <p>1_展示に関する活動：概要説明やガイドツアーの実施／学習教材の開発・提供など 2_教育的行事活動：観察会、ワークショップ等の開催 3_学習支援活動：ライブラリー機能（リファレンス機能含む）／研究支援 4_市民との交流促進に関する活動：市民が文化活動を行えるサロンの提供 5_学校教育との連携：学習支援計画の作成／教師の指導サポート／資料の貸出など 6_生涯学習関連：地域の自然科学系学術研究サークルの支援／移動博物館の提供など 7_観光関係者への研修 8_博物館実習生の受け入れ 9_無形文化財の保護・継承 10_情報発信：刊行物等の出版／コンピュータネットワークによる情報発信</p>
<p>利用者サービス</p>	<p>さまざまな来館者のニーズや属性に対応するため、運営面とハード面の双方からのサービスを提供する。一人一人に合わせたきめ細かい来館者別対応を行う。</p> <p>1_身障者・高齢者対応：介護者の入館料免除／専用トイレや触地図の設置など 2_外国人対応：外国語パンフレットの作成／サインへの外国語併記など 3_団体対応：入館料の割引／待ち合わせ場所の確保など 4_児童・生徒対応：各種プログラムの開発／解説へのルビ添付など 5_乳幼児対応：ベビー用品の貸出・販売／授乳スペースの確保など 6_迷子対応：迷子受け付け／一時預かりスペースの確保など 7_救護対応：救護スペースの確保／救急車動線の確保／救急備品の準備など 8_遺失物・拾得物対応：受け付け／保管スペースの確保など 9_重要人物（VIP）対応：対応手引き書の作成／応接スペースの確保など 10_緊急時対応：対応手引き書の作成／訓練の実施／防災設備の充実など 11_苦情対応（クレーム対応）：運営への活用／応接スペースの確保など 12_その他の利用者サービス [コインロッカー／公衆電話／郵便受付／総合案内でのその他サービス] 13_規制事項 [指定場所以外での飲食・喫煙／フラッシュ撮影および三脚の使用／ハンドマイクの使用]</p>
<p>企画開発・管理運営</p>	<p>博物館活動への参加と利用の促進・生涯学習ニーズ充足のため、中長期的展望に立って博物館全体の活動を総合的に企画調整し、各活動の有機的な連携と計画的な推進を図る。</p> <p>1_新博物館と来館者を結びつける活動（ミュージアム・マーケティング）の展開 1. “新博物館らしさ”の確立（ミュージアム・アイデンティティの確立） 2. マーケティング調査の実施 2_企画調整：新博物館の各活動計画の調整／中長期的計画の立案／他施設との連携 3_支援組織の構築 1. ボランティアの受け入れ 2. 友の会組織の構築 3. 企業による支援の受け入れ 4. 支援財団の設立</p>

■石垣市立八重山博物館の現状

所在地	石垣市登野城 4-1																																																	
開館年	1972 年																																																	
延床面積	644 ㎡																																																	
展示面積	常設陳列室 305.20 ㎡／特別陳列室 81.60 ㎡																																																	
敷地面積	1,748.41 ㎡																																																	
所蔵資料点数	20,905 点（令和 5 年 3 月 31 日現在）																																																	
入館料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 常設展：大人 200 円 学生（中学生以上） 100 円 ※小学生以下は無料。20 名以上の団体見学は 2 割引 ・ 企画展：無料 ・ 障がい者手帳を提示していただいた場合、本人と引率者 1 名は無料 																																																	
開館時間	9:00-17:00（入館は 16:30 まで）																																																	
休館日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日まで） ・ 祝日 ・ 年末年始（12 月 29 日～1 月 3 日） ・ 燻蒸及び展示替の日 																																																	
アクセス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 路線バス：バス停[博物館前] 下車 ・ 空港から：タクシー・レンタカー等で、約 30 分 ・ 駐車場：一般駐車場あり 																																																	
入館者数	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="2">令和3年度</th> <th colspan="2">令和4年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">有料（個人）</td> <td>一般</td> <td>3,577</td> <td>一般</td> <td>6,398</td> </tr> <tr> <td>学生</td> <td>191</td> <td>学生</td> <td>334</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">有料（団体）</td> <td>一般</td> <td>0</td> <td>一般</td> <td>98</td> </tr> <tr> <td>団体</td> <td>0</td> <td>団体</td> <td>133</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">無料（個人）</td> <td>一般</td> <td>137</td> <td>一般</td> <td>1,399</td> </tr> <tr> <td>学生</td> <td>43</td> <td>学生</td> <td>44</td> </tr> <tr> <td>児童</td> <td>375</td> <td>児童</td> <td>813</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td></td> <td>4,323</td> <td></td> <td>9,219</td> </tr> <tr> <td>開館日数</td> <td></td> <td>244</td> <td></td> <td>287</td> </tr> </tbody> </table>					令和3年度		令和4年度		有料（個人）	一般	3,577	一般	6,398	学生	191	学生	334	有料（団体）	一般	0	一般	98	団体	0	団体	133	無料（個人）	一般	137	一般	1,399	学生	43	学生	44	児童	375	児童	813	計		4,323		9,219	開館日数		244		287
	令和3年度		令和4年度																																															
有料（個人）	一般	3,577	一般	6,398																																														
	学生	191	学生	334																																														
有料（団体）	一般	0	一般	98																																														
	団体	0	団体	133																																														
無料（個人）	一般	137	一般	1,399																																														
	学生	43	学生	44																																														
	児童	375	児童	813																																														
計		4,323		9,219																																														
開館日数		244		287																																														
職員体制 ※令和 6 年 9 月末 現在	館長※（1 名）— 管理係※（2 名／補佐兼係長＋係員） 学芸係※（2 名／係長＋学芸員） ※職員 計 5 名 会計年度任用職員 4 名 <div style="text-align: right;">→全体合計 9 名</div>																																																	



石垣市

日本最南端の自然文化都市

新博物館建設推進シンポジウム
Symposium for Promoting the Construction of a New Museum

新しい博物館に求めるもの

発行：石垣市企画部観光文化課

2024年11月28日